

---

# 自殺はダメヨマン

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自殺はダメマン

### 【ZPDF】

N6705D

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

血殺ばかりのこの世の中に、救いのヒーローが現れた！

「自殺はダメヨー！」

と、高らかに叫びながらベランダの柵に足をかけている私の前に、全身タイツのヘルメット男が現れた。単刀直入に言ってキモい。あらうことかこの男のせいで一瞬自殺する気が失せてきた。でも、本当に止めたくはない。こんな奴のせいで止めることになった日には、日本人の恥だわ。

私は男を無視して柵を越えた。当然その変態は私に訴えかけてくる。

「自殺は駄目だ、トシ子！」

「違います」

「とみ子！」

「クイズじゃありません。それにさつきから一文字もあつてません」「ジエニファーー！」

「あ、わかった！　みたいな言い方しないでください。私が欧米人種に見えますか？」

変態は悩む。

「……トシヨ？」

「あなたの過去に何があつたんですか。『と』から離れてください」

「……か弱き少女よ！」

あ、逃げた。なんだこいつ。

「何故自殺をする？」

「私は中途半端なの、いつもいつでも。だから男はみんな浮気相手のほうが可愛いって言つてそつちに流れてく。こんな私が半端扱いな世界が嫌になつたの」

何故か私はそいつに自分の自殺動機を話していた。それを聞いた奴は、うんうんと頷いた。

「自殺はな、痛いんだぞ」

「お前さ、何のためにさつきの質問した」

「人の話を聞いてくれ」

「私と無理心中されたいのか、コラ」「う」

「自殺は君が考へている以上に痛いんだぞ。わかつてないね?」

「したことないので、そんなことわからない。でもこの高さなら一発で死ねるでしょう?」

「甘いな、こんな高さでは、地面に当たつただけでそう簡単に死ねるものではないんだよ」

いきなり真面目な話になつて、私はゾッとした。いや、そんな弱気なことで自殺なんて出来ない。出来るわけがない。

「そんなことわかってる。私にはその覚悟がある!」

「わかつていらないな。痛みを知つている人間はそんなこと言わないぞ」

そう言つと、タイツ男は、私を押し退けて柵にあがつた。

「よく見ているんだよ、とう!」

「あつ」

男は、ここの私を差し置いて飛び降りた。まだ柵を越えようとしただけの私を差し置いて。全くと言つて躊躇なく。

りんごと水風船がいくつか同時に落ちてはじけたような、嫌な音がして、私は目を逸らした。そして、急いで地上まで駆け降りた。自分が自殺を考えていたことなんて半分忘れていたらしい。いや、彼を見て怖くなつたのかもしれない。

地上では、紅色に染まつたタイツを着た男が倒れていた。何故か誇らしげだ。

すぐに私は駆け寄つた。変態と罵つた相手が、今はとても輝いて見えた。「こいでわかつたる、自殺はこんなに痛いんだ……」

「喋らないで! ああ、なんでこんなことを!」

「俺は自殺を止める男さ、どんな手を使つても自殺を……」

「だからって、自分が死んだら本末転倒でしょう? !」

私がそう指摘したら、そいつは苦しそうに呼吸しながらも、腹が

立つほど不敵にニヤリと笑つた。ヘルメットのおかげで、その嫌らしさはさらには際立つ。

「だから、君が次の“自殺はダメヨマン”だ  
「私は女だからマンは無理じゃない！」  
「そうか、言われてみればそうだね。うつかりさつぱりだ  
「冗談めいたつもりだろうか。笑えないつえにつまらない。  
「俺の意志を継いでくれれば、名前なんて些細な問題ではない……お願いできるかな？」

「……」

私は悩んだけれど、答えは決まっていた。決められていた。  
「やつてあげるよ。変態でも、自殺の痛みを教えてくれた。もう私は自殺しない。自殺を止めるんだ」

「そうか、これで安心だ……がくつ

「へんた―――！」

私は、彼の第一印象で呼んだ。人が、違う意図で野次馬にやつてきた。

数日後

「俺は死ぬんだ、死なせてくれ！　みんなくるなあああ！」

「までえええええ！」

自殺を志す少年の前に、理解しがたいコスチュームを着た女が現れた。

女は、少年を押し退けるとこう言った。

「あなた、自殺がどれだけ痛いか知らないでしょ？」  
「や、やつたことないんだから、知るわけないだろ！」  
「やつぱりね、なら私がどれだけ痛いか、見せてあげる！」

「最近、我が国で小中学生の自殺がやたら増えましたな」

「少子化もここまできたか、先が思いやられるなあ」

「日本もいよいよ終わりが見えてきたのか……おつと時間だ」

「ピッ。

「お、何か見たい番組でも……あ、これ最近人気の」

「年甲斐もなく、何故かハマってしまったんだよ。『自殺すんなマ

ン』」

## (後書き)

初の完全携帯書き。今作者は個人的鍛練のため、パソコンのない環境。すなわち半田舎で合宿しています。とにかくいろいろ本を読んだりしていますが、なんとなく携帯使つて書いてみましたが、携帯で書くつて効率悪いですね。出来る限り読書に専念したいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6705d/>

---

自殺はダメヨマン

2010年10月21日20時33分発行